2024年9月15日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

幸も禍も主から受け取る

［創世記41章46～57節］

ヨセフは、エジプトの王ファラオの前に立ったとき三十歳であった。ヨセフはファラオの前をたって、エジプト全国を巡回した。豊作の七年の間、大地は豊かな実りに満ち溢れた。ヨセフはその七年の間に、エジプトの国中の食糧をできるかぎり集め、その食糧を町々に蓄えさせた。町の周囲の畑にできた食糧を、その町の中に蓄えさせたのである。ヨセフは、海辺の砂ほども多くの穀物を蓄え、ついに量りきれなくなったので、量るのをやめた。飢饉の年がやって来る前に、ヨセフに二人の息子が生まれた。この子供を産んだのは、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトである。ヨセフは長男をマナセ（忘れさせる）と名付けて言った。「神が、わたしの苦労と父の家のことをすべて忘れさせてくださった。」また、次男をエフライム（増やす）と名付けて言った。「神は、悩みの地で、わたしに子孫を増やしてくださった。」エジプトの国に七年間の大豊作が終わると、ヨセフが言ったとおり、七年の飢饉が始まった。その飢饉はすべての国々を襲ったが、エジプトには、全国どこにでも食物があった。やがて、エジプト全国にも飢饉が広がり、民がファラオに食物を叫び求めた。ファラオはすべてのエジプト人に、「ヨセフのもとに行って、ヨセフの言うとおりにせよ」と命じた。飢饉は世界各地に及んだ。ヨセフはすべての穀倉を開いてエジプト人に穀物を売ったが、エジプトの国の飢饉は激しくなっていった。また、世界各地の人々も、穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやって来るようになった。世界各地の飢饉も激しくなったからである。

[1] 10数年間の時の流れの中で

　創世記の「ヨセフ物語」を読んでいます。先週は、エジプト王に仕える侍従長ポティファルの家と財産の管理まで任されることになったヨセフが、こともあろうにそのポティファルの妻に、夫の留守中しつこく言い寄られ、とうとう言われのない濡れ衣を着せられて、王の囚人をつなぐ監獄に入れられてしまったという話を読みました。その誘惑がやってきた時もヨセフは、その妻に対して「どうしてそのような大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょうか」（39:9）と、キッパリとはねのけました。ヨセフは、神様をこそ畏れ、神様を本当に信頼していたということが良く分かります。そのような彼の信仰は、彼が、故郷からも遠ざかり、たった独り、深い孤独を経験したこととつながっているのではないかということを先週お話しました。

　今週はその続きです。先ほど読んで頂いた41章の箇所に至るまでにはこのようなことがありました。

　ヨセフは、監獄にありながらその監獄の囚人の世話をする立場を与えられていたのですが、そこに王ファラオに過ちを犯したというかどで、王の給仕役と料理役が投獄されました。その二人は夜、夫々に夢を見たのです。そしてヨセフに「夢を解き明かしてくれる人がいない」と告げました。それを聞いたヨセフは「夢は神が解き明かしをされます」と言って、その賜物を持つ彼がそれを解いたのです。彼はその夢の意味を、良いことも悪いことも、そのまま解き明かしました。給仕役には、やがて解放されて職に戻れること、また料理役には、あなたはやがて処刑されてしまうことになると言いました。そういう未来を神様に示され、それをそのまま語ったのですが、その通り、三日後にそのことは現実になりました。それが40章に書かれていることです。

　実は給仕役にはヨセフは「あなたが王のもとに戻れたなら、私のことを王に話して欲しい、私も牢に閉じ込められる理由など何もないのだから」と語っていました。しかし、給仕役は自由になると、そのことはすっかり忘れてしまい、既に2年が経過してしまいました。ヨセフはまだ獄屋の中にいるのです。

　その後、創世記41章、ついにヨセフのその「夢を解く」賜物が、最大に威力を発揮する時がやってきました。エジプト王ファラオが夢を見て、そのせいで胸騒ぎが収まらず、その夢を解き明かすことが出来る者を探していた時、職に復帰した例の王の給仕役が、そういえばこんなヘブライ人の若者が獄中にいました、と王に告げ、かくしてヨセフは獄を出ることになって、王の夢を解き明かすことになったのです。それはヨセフ30才の時であったということが41：46に書かれています。彼が野原で外国の隊商に売られたのが17才頃のようですから、それから彼は10数年間、過酷で孤独な時を過ごしていたということになりますね。

[2]　「賜物」は方向を持っている

その夢が告げていることは、今後の幸いと禍（わざわい）についてだということをヨセフは王に語り、更に王様に、これから来る7年間の豊作の間にきちんと穀物を町々に蓄えさせなさい、そうすればその後の7年間の大飢饉の時に救いとなる、と進言をします。ファラオはそれを聞いてこう言います。「ファラオは家来たちに、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と言い…」（38節）。ファラオは、異国の若者ヨセフの語る言葉を神様の示しとして聞いたのです。これも凄いことだと思います。そしてヨセフを、エジプトの国の政治を司る者として立てたのです。宰相ですね。誰も考えていなかったことだと思います。‟禍転じて福となす”ではありませんが、しかしこのことが、やがて彼が、祖国にいる父親ヤコブ（イスラエル）や、兄たちとの感動的な再会につながります。それは来週見ることになりますが、私が今日ここでご一緒に考えてみたいと思ったことは、「神様の賜物」ということです。「賜物」。…私たち、「自分にはこういう賜物がある」とか「〇〇さんはこういう賜物を持っていていいなあ」などと思ってしまうことがあると思います。特に教会では「賜物」というのは、キリスト教用語かと思うほどによく使われると思います。でも「賜物」って何なのでしょう？文字通りに言えば、「賜物」とは「贈り物」です。「能力」とイコールではないと思います。まして自分の「趣味」や「好きなこと」とも違います。ヨセフの賜物は、「夢の解き明かし」ですが、では彼は夢を解くことが「好き」だったのでしょうか？いいえ、むしろそれは彼にとって苦い思い出と結びついていることです。‟お父さんやお兄さんは、やがて僕にひれ伏すようになるよ”というような夢を見たということを言ったので、彼は反感を買い、兄たちに売り飛ばされてしまったのですから。しかし、ヨセフは、エジプトの獄中、また王の前で、あるがまま夢の解き明かしをしました。人間の目に良いことも、また悲惨なこと不都合なことも、隠すことなくつまびらかにしました。なぜなら、彼は40:8で語っているんです。「解き明かしは、神がなさることではありませんか」と。賜物は、私ではなく、神様が働いて下さるものなのだと。これは含蓄が深いですね。私たちはもしかしたら「賜物」というものを、自分の手の内にあるものとして扱っていないだろうか、と思います。「賜物」とは、自分の思いを超え、神様の目的に適って用いて頂けることだと思います。だから、私自身も何とか教会の業に仕えていられるのです。私の力とか能力、考えではとても担うことは出来ません。

ヨセフは、ある意味、処刑されることも覚悟で王の夢を解き明かしたと思います。もし王の意に添わなければどうなっても不思議じゃない。けれども、彼は割引なく語った。彼は自分の人生を主に委ねる心を既に持っていたのだと思います。これは素敵なこと、爽やかなことです。もしかしたら、私も含め、私たち、周りのことを気にしすぎるのかもしれません。もちろん周りを配慮し、よく考えることは必要だと思います。しかし、その考えの方向（ベクトル）です。自分を喜ばせるため、或いは己を守るために一生懸命思考するのか、そうではなく、神様のため、また隣人やこの私たちの世界の幸いのために自分の賜物（＝神様からの贈り物）を差し出すのか、それが問われているのではないでしょうか？

[3]　二人の子供たちの名前に見るヨセフの信仰

王の次に一国を率いる存在となったヨセフの人生は、まるで大河ドラマのような人生だと言えますが、彼の人生は、聖書が幾度も書いているように「主がヨセフと共におられ」る人生（39:21他）です。41章16節でも、ヨセフはファラオに「私ではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです」と言ったように、神様あってこその私であり、私の働きである、ということにブレがありません。こう言い切れるヨセフの信仰に学びたいと思います。

そのことは、ヨセフがファラオによってこのエジプトで家庭を持つようになり、やがて二人の子供が与えられますが、その子たちの名をどうつけたかということにも表れていると思います。41:51に、「ヨセフは長男をマナセ（忘れさせる）と名付けて言った。「神が、わたしの苦労と父の家のことをすべて忘れさせてくださった」 とありました。このことに私は感動します。彼にとって「忘れたいこと」が確かにあったのですね…。私たちも「忘れたいこと」があるのではないでしょうか。けれども時折頭に甦ってきては辛くなる。それを神様は、忘れられるようになる、と言って下さっているのではないでしょうか？あなたの人生、全部わたしに預けて生きていいよと神様は仰って下さっているのです。その証拠に、私たち罪人に寄り添って下さるイエス様を送って下さったのではないでしょうか!?これが「福音」ですね。そして、ただ忘れさせて下さるだけでは終わりません。私たちに新しい生活、新しい人生を与えて下さるのです。52節。「また、次男をエフライム（増やす）と名付けて言った。「神は、悩みの地で、わたしに子孫を増やしてくださった」。そうです、この名前は、ただ子供を与えて下さったということではなく、ここには、ヨセフに対する神様の憐み、祝福、受容、これまで困難の中を歩むことを余儀なくされた者に対する「光」を与えて下さっているのだと思います。それをヨセフは感じているのでしょうね。だから、「マナセ」そして「エフライム」という名を付けた。確かどなたか、クリスチャンの家庭に生まれた女の子に、笑子「笑いの子」という名前の方がいたと思いますが、同じような神様への思いからなのかもしれません。

この後7年間の豊作、7年間の大飢饉がやってきます。都合ヨセフはどれだけ長い間このエジプトに居ることになっているのかと思います。少年時代から青年、もう中年になっています。ヨセフ、結構大変な人生です。しかし、彼はその中で自分を見失うことなく、冷静に判断し、誠実でした。幸いな時も、禍と思える時も、「主がヨセフと共におられる」ということを信じて、地に足が付いた生活をしていきました。ヨセフの生き様に教えられることは多いと思います。お祈り致します。

主なる神様、今日もご一緒にあなたの前に出ることが出来て感謝します。どうか、人生の幸いも、また幸いとは思えないようなことも、すべては大きなあなたの愛と憐みの中にあることを信じる信仰をお与え下さい。そして、色々なことを考えてかえってこんがらがってしまう私たちの心を、あなたに素朴に信頼する心を与えて下さる中で、明るく爽やかに生きることが出来ますように。私たちの人生に同伴して下さる主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。